国立国語研究所学術情報リポジトリ

A note on culture and language of sex

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 友左, WATANABE, Tomosuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001771

「性の文化とことば」覚え書き

渡　辺　友　左

1　はじめに

男性と女性が性的に結びつくこと，つまり性行為と，それに結果される女性の姙娠――出産は，人類・民族の生存にとって欠くことのできない最も重要でかつ基本的な行為の一つである。個人の生存にとって，食事や排泄・睡眠などが欠くことのできない最も重要でかつ基本的な行為の一つであるのと全く同じである。

とすれば，ごく一般的に言って，この「性行為」を意味する語は，いかなる民族語，いかなる地域のいかなる方言にも間違いなく存在するはずだ，と思う。そこで，それが異民族語やその方言の場合どのようなものであるか。そして，異民族の社会ではその語の使用をめぐって，どのような社会的規制が働いているのか，あるいは，いないのか……などなど。このような事柄の比較文化的な調査研究は，一般に性というものに関する考え方や行動様式の比較文化的な調査研究に通ずるものとして，もしかしたら，たいへん興味のある問題を提起してくれるのではないか，とわたしは思っている。なぜなら，わたしたち日本人と日本語の各地方言の場合，以下に述べるような事実が存在するからである。

(1)　北は青森県津軽地方の方言から，南は沖縄県八重山群島の方言まで，性行為を意味する俚言は，他方において女陰を意味する俚言である。つまり日本各地の方言社会には，男性と女性の間に営まれる性行為を言語的には女陰を意味する俚言によってとらえるという型が存在する。おそらくこの言語的型は，日本の方言社会においては普遍的なものであろう。方言学者宮良当壮さんは，八重山群島石垣島の出身であるが，その著『八重山語彙』（昭和５年・再版昭和41年　東洋文庫）での方言語彙記述において，「女

陰」という共通語にさえ「性行為」の意味を認めている。

(2) この女陰と性行為の双方を意味する俚言の使用を含めて，一般に性というものに対して，日本の伝統的民俗文化（・基層文化）はきわめておおらかな態度を示す。

(3) これに対して，儒教やキリスト教など外来文化の影響のもとに形成され，現代日本社会において支配的かつ標準的となっている性文化は，きわめてきびしい態度を示す。つまりわたしたち日本人の性文化は，この意味で非常にはっきりとした二重構造の形態をとっている。

以下に述べることは，以上のことについてわたしが書きとめてきた覚え書きの一部である。

2 方言集・方言辞典における俚言記述の事例

わたしは，一昨年度から国立国語研究所第二資料研究室での仕事として，全国各地の方言集・方言辞典から方言の親族語をカードに採集する作業をつづけてきている。そこで，この作業のついでに性行為を意味する俚言としてどのようなものが収録されているかを見てきた。かなり注意して見てきたけれども，問題の語を収録してあるのは非常に少なかった。

これまでわたしが目を通した方言集・方言辞典は約四百冊。そのほとんど全部が方言の親族語を収録しており，それから採集した親族語のカードは約一万二千枚に達する。それなのに，性行為を意味する俚言を収録してあったのは，このうちわずか13冊。単語にしてのべ33枚のカードを採集したにすぎなかった。

しかし，これはもちろんそれぞれの方言に問題の語がないということを意味しているのではない。人前でこの語を口にすることをタブーとする現代日本の支配的な価値観が，方言編集の上でも一つの教育的配慮として働き，その語を収録させなかったまでのことに過ぎない。次節にあげることであるが，ヘッペという俚言を聞いただけで金田一京助さんを狼狽させ赤面させたあの価値観。それに，評論家俵萌子さんにこれも次節にあげるような発言をさせた価値観。これらの価値観に立てば，問題の語がいくら方言の中にあっても，方言集には

収録しないのが編者の見識だ，ということになるからである。

だが，問題の語を方言集に収録しないのが編者の見識であるのなら，その反対にそれをあえて収録するのも，方言編集の上では立派な見識である，と言える。そして，この収録してある13冊の方言集を見て，わたしは次のことを知った。北は青森県津軽地方の方言から南は沖縄県八重山群島の方言まで，問題の語は，語形は違うが，どれも他方においては女陰を意味する俚言であったのである。以下にその事例を示す。(以下，下線は渡辺。)

青森県

1　『弘前語彙――津軽語彙第1編――』松木　明　　昭和29年

エッペ　①女陰　②交接

山形県

1　『米沢方言辞典』上村良作監修　米沢女子短大国語研究部編　昭和44年

べっちょ　<全>(注1)女陰。交合。

べっちょする　<全>　交合する。

(注1)　<全>とは，その語が全年齢層にわたって使用されていることを示す。

群馬県

1　『安中の方言』　坂本英一著　昭和45年

オマンコ　女性器（成人)。性交を意味する。

富山県

1　『富山県方言集成稿』　富山市教育研究所編　昭和37年

ちゃんべ　①女子の外生殖器。②交合の最も一般的な称。

2　『砺波民俗語彙』　佐伯安一著　昭和36年

べべ　女陰および交合。

チャンベ　女陰または交合の最も一般的な称。

大阪府

1　『上方語源辞典』　前田勇編　昭和40年

やち　女陰。

やちへぐ　交接する。

徳島県

1　『阿波方言集』　森本安市著　昭和18年

ボボ　女根。男女の情交。

愛媛県

1　『国語拾遺語原考』　久門正雄著　昭和35年(注２)

おまんこ　（名）　お」は接頭語。まんこ」は，「めのこ」（女子――古語）→めんこ→まんこ」と変化したもので，「め」は女の義。

（中略）さて，この語の語原は，右のやうに，ただ「女」といふだけの意の語であるが，それは女性の最も特徴的なものとしての，その陰部を指す語として，男により作られた語である。（下略）

おまんこする　（句）　「おまんこやく」に同じ。

おまんこやく　（句）　「おめこやく」に同じ。

おめこ　（名）　陰門。ただ「めこ」ともいふこともあるが，接頭語「お」をつけて言ふ方が普通である。

おめこする　（句）　「おめこやく」に同じ。

おめこやく　（句）　房事をする。

（注２）愛媛県西条市・新居浜市地方の方言語彙を記述したものである。

福岡県

1　『博多方言』　原田種夫編　昭和41年

ぼぼ　女の陰部。性交。

2　『川筋方言集』　山近弥壮著　昭和43年(注３)

おそそ　女陰。

おそそする　性交する。

（注３）福岡県遠賀川の流域地方とその支流である彦山川の流域地方の方言を扱った方言集である。

佐賀県

1　『佐賀の方言　上巻』　志津田藤四郎著　昭和45年

チョンチョン　「性交」を佐賀では「チョンチョン」という。また，「女陰」のことも「チョンチョン」「チョンベ」である。共通語で「チ

ョンチョン」というと「点々」である。

沖縄県

1　『沖縄語辞典』　国立国語研究所編　昭和38年

hoo　（名）女の陰部。ほと。～sjuN。交接する。

2　『八重山語彙』　宮良当壮著　昭和５年　再版昭和41年

ミートーマ　（名）　女陰。ミトゥ（みと，玉門）の美称。（小浜）（注４）

ミートーマ・スン　（他動）　交接す。女陰すの義。（小浜）

マンジュ　（名）　女子の陰部。女陰マ・ミトの転。マは真，みとは凹みたる所の義。

マンジョー　（名）　交合。（古）まぐはひ（遭合）。美斗能麻具波比。くながひ。マンジュ（女陰）をはたらかせし語。

マンジョー・シィン　（他動）　交合す。女陰すの義。

マンジョー・シャー　（名）　交合をなす者。

ピィー　（名）　女陰。玉門。（小浜。新城。（注４）波照。（注４））

ピィー・シィン　（他動）交接す。女陰すの義。（新城。波照。（注４））

ピィー・シー　（名）　交接。女陰しの義。（竹富。鳩間。（注４））

ピー・スン　（他動）　交接す。女陰するの義。（竹富。鳩間。黒島。）

ヒー（名）　女陰。玉門。割れ目。裂目の義。

ヒー・キルン　（他動）　交接す。女陰するの義。（与那）

（注４）（小浜）は，八重山群島の小浜島。（新城）は新城島，（波照）は波照間島，（竹富）は竹富島，（鳩間）は鳩間島のこと。

上記の語のうち，ミートーマ・スンとピー・スンのスン，マンジョー・シィンとピー・シィンのシィン，ピィー・シィーのシィー，ヒー・キルンのキルンは，ともに「する・やる・為す」などの意味をもった方言の動詞である。つまり八重山群島の方言では，女陰を意味するミートーマ・マンジュ・ピィ・ヒーなどの俚言に，やる・する・為すを意味する動詞スン・シィン・スンなどが結合して，性行為をするという意味の動詞が出来あがっている。発想は本土方言の場合と全く同じである。

参考までに，ここで隠語の世界をのぞいてみる。楳垣実編『隠語辞典』（東

京堂）を資料として，その中から女陰と性行為の二つをあわせて意味する隠語を拾ってみると，次のようなものがある。（単語では女陰だけを意味し，連語の形で性行為を意味するものを含む。）

おまつり〔お祭〕　①女陰。②交接。（江戸時代の俗語）

まつりをわたす〔祭を渡す〕　情交する。許す。（同上）

おんこと（御事〕　①交接。②女陰。（同上）

ちょんこ　①女陰。②情交。（明治時代の俗語）

ふいご〔鞴〕　①交接。②女陰。

びく〔比丘〕　①赤ん坊。（明治時代のさんかのことば）　②女。娼婦。
④女陰。

びくつく〔比丘突く〕　交接する。

びくつる〔比丘吊る〕　同上

びくひく〔比丘引く〕　同上

びり　①婦人。②下女。③芸者。④娼婦。⑤私娼。⑥女陰。

びりをける　①交接する。②婦人に暴行する。

びりをかます。交接する。

びりかまり　交接。

へき〔開〕　女陰。（江戸時代の俗語）

へきをふく〔開を吹く〕　交接する。（大正時代の盗賊の隠語）

みと〔御門〕　女陰。（奈良時代の俗語）

みとあたわし〔御門婚し〕　情交。（同上）

みとのまぐわい〔美登の麻具波肥〕　情交。（同上）

やち〔谷地〕　①女陰。②女。③娼婦。私娼

やちいく〔谷地行く〕　交接する。（大正時代の香具師・盗賊の隠語）

やちをそぐ〔谷地をそぐ〕　同上。　同上。

やちをふく〔谷地を吹く〕　同上。　同上。

やちぎる。〔谷地ぎる〕　同上。　同上。

やちせめ　〔谷地攻め〕　交接。

ただし，この隠語辞典には，女陰ではなく男陰を意味する隠語があわせて性

行為も意味するという事例があった。方言集・方言辞典の類では，この事例にはまだ一度もぶつかっていない。

どっこかじ〔独鈷加持〕　情交。〔どっこは男陰の隠語。加持は祈禱〕（江戸時代の僧侶の隠語）

それから，女陰だけでなく男陰も意味する隠語があわせて性行為を意味する事例が一つ見つかった。これも，方言集・方言辞典の類ではまだ一度もぶつかっていない事例である。

かねて　①男陰。女陰。②交接。（江戸時代の俗語）

さて，ここで以上に述べてきたことを整理してみよう。わたしがこれまで目を通してきた約四百冊の方言集・方言辞典の中で問題の語を収録してあったのはわずか13冊。収録されてあった語も以上にあげたとおりのもので，数は非常に少なかった。しかし，それでも北は青森県津軽地方の方言から南は琉球八重山の方言まで，問題の語は，語形は違っていても，どれも他方において女陰を意味する俚言であったことがわかったのである。次節で紹介する例 5 の事例で，アイヌの老婆が金田一京助さんに向かってヘッペと言っているのだから，おそらく北海道方言の場合も事情は同じなのであろうと思う。

つまり日本各地の方言がささえている民俗文化（・基層文化）には，男性と女性の間に営まれる性行為を言語的には男陰でなく女陰を意味する俚言でとらえようとする発想が存在する。宮良当壮さんが名著『八重山語彙』において，共通語の女陰にも性行為の意味を認め，「女陰する」という共通語訳を造語した発想などは，特に注目すべきことであろう。

少し横道にそれるが，永野賢さんは，金田一京助さんがユーカラの特別講演をした1953年度九学会連合大会で，共同課題「性」について言語学の側から研究報告をした。永野さんは，この報告の中で，母校の旧制第三高等学校の学生寮では，寮生が男陰・女陰をともに etwas という単語で呼び，性行為することを etwazieren といっていた……と述べている。（永野賢「性とことば」『人類科学』第6集　p. 62～63)。ドイツ語の etwas を動詞のようにもじったもので，旧制高校の寮生が消灯後ローソクを灯して勉強することをドイツ語の動詞ふうにもとれるローベンという語でよんでいたというのと同じで，たしかにうまい

造語である。しかし，わたしが上に報告した日本各地の方言の造語法に従うならば，この etwazieren の etwas は男陰は除いて女陰だけを意味させておくのが本筋だった，ということになるだろう。

日本各地の方言がもっているこのような発想は，隠語の世界でもほぼそのまま踏襲されている。男陰を意味する隠語が性行為を意味する隠語にも使われているものとして，楳垣さんの『隠語辞典』には「独鈷加持」の一例が見える。江戸時代の僧侶の間で使われた隠語である。独鈷は，真言宗などで用いる金剛杵のことであって，これが男陰を意味する僧侶隠語になった。

しかし，この男陰を意味する独鈷が「独鈷加持」の形で性行為を意味するようになったのは，僧侶の性行為がもっぱら僧侶間の男色の形で行なわれていたことと関係がある。男性が男性と行なう性行為であればこそ，例外的に男陰を意味する隠語が性行為の意味をもつようになったのであろう。ちょっとえげつないが，男色の世界の陰惨さを諷刺した古川柳に次のようなものがある。山伏の男色を題材としたものである。

山伏は　どっこを呑んで　へどを吐き

3　性文化の二重構造的様相に関する若干の事例

例1

『児童心理』（金子書房）の昭和48年1月号で，評論家の俵萠子さんが，心理学者の長島貞夫さん（埼玉大学教授）他2名の方と性教育をテーマに座談会をやっていた。席上，「（性教育は）性交にも触れるべきか」というくだりで，俵さんが次のように発言しているのがわたしの目をひいた。

> もう一つ，地域社会で情報の吸収が今の社会ではできないということがあるのです。昔は地域社会みたいなところから情報を吸収してきたわけですけれども，わたしから言わせると，今の地域社会に蔓延している性というものは，非常にゆがんだ形だと思うのです。そういう形で子どもに性を言いたくない。ですから，たとえば，女の子の性器というものに正式ないい名称がない。女の子の性器というのは，性交そのものを意味することばであるというふうな社会の実情の中で，子どもが最初にそういうふうな雰

囲気で性というものを受けとるということが，わたし自身は耐え難い。
（下略）（上掲書　p. 147～148）

女子の性器に「正式ないい名称」がないということなら，それは性教育の問題であるばかりでなく，国語問題でもあるかも知れない。だが，わたしがこの発言に目をとめたのは，もちろんこのことではない。そうではなくて，この発言全体の調子がわたしたち日本人の伝統的な性文化がもっている行動様式，たとえば次にあげるいくつかの事例などと正面から対立するものなのではないか，と思ったからである。

例2

藤林貞雄さんの『性風土記』（岩崎美術社　昭和42年）によると，群馬県碓氷郡里見村（現在群馬郡榛名町の一部）あたりでは，道祖神祭りの夜，子どもたちは，親たちが寝床にはいった頃を見はからって，次のように大声ではやしたてながら村回りをしたという。（以下，下線は渡辺。）

じいさん，ばあさん，出ておいで
しかけたベッチョやめてきな。（上掲書　p. 30～31）

このベッチョは，前節にあげた『米沢方言辞典』が収録しているベッチョと同じく，女陰と性行為を意味する俚言であるが，ここではもちろん性行為の意味で使われている。ここ里見村の子どもたちは，このベッチョという俚言を通して性というものを受けとってきたのである。そして，道祖神祭りの夜それを大声ではやしたてながら，村回りすることを村の伝統的な習俗として公認されてきたのである。おそらくこの子どもたちにとって，「女子の性器をあらわすことばが性行為そのものをあらわすことばであるというような社会の実情の中で，子どもが性を受けとるというのは堪え難いことだ」という趣旨の俵さんの発言は，実感としてなかなか理解しにくいものであっただろう。これは，次の例3・例4の祭りの歌の場合，それに例5のアイヌの老婆の場合も同じである。

例3

『性風土記』によると，同じ群馬県群馬郡元総社村（現在前橋市の一部）地方では，道祖神祭りの際に歌う祭り歌の一つに次のようなものがあったとい

う。

道祖神が燃えますよ。

はや夜が明けますよ。

この夜の長いに，さんざベベこいて，

猫も杓子もみな起きろ。(上掲書　p. 42)

このベベは，前出の『砺波民俗語彙』が収録しているベベと同じく，女陰と性行為の双方を意味する俚言であり，ここでは性行為の意味で使われている。

例 4

愛知県北設楽郡地方では，秋祭りの夜におどりといっしょに歌うはやし歌に次のような一節があったという。

鬼が出た。ツビをしよ，

注連より外で，注連より外で，

鬼が出た。ツビをしよ。

注連より外で，テンツク舞うた。(上掲書　p. 42)

このツビは，女陰を意味する古語であって，『和名抄』にも収録されている。ここではもちろん性行為の意味で使われている。

例 5

九学会連合の1953年度の共同課題は，「性」であった。東京上野の国立博物館講堂で開かれたその研究発表大会で，大会会長の金田一京助さんは，この共同課題にちなんだ特別講演をした。題は，「アイヌ文学にあらわれた性」というものだった。この講演内容は，のちにこの大会の研究発表を特集した『人類科学』第 6 集の巻頭論文になった。その中に次のようなくだりがある。

婦女子のユーカラ

ユーカラのうちでも婦女子のユーカラ，すなわち，メノコユーカラは，英雄のユーカラのように長くはなく，大抵一篇が一つのテーマに了って，何段物というほどのものはあまりない。

ただし，すべてのユーカラと同様，我はしかじか，我はしかじかと，第一人称の物語で，物語の初めは，必ず生い立ちにはじまる。

その中に，こういう表現で始まるものがあった。

「幼い私は，一人の妹を育てつつ，一つの家に，ただ二人きりで生活していた。素より親と親との約束で，夫婦になるべき二人の間のことであったから，ゆりかごの中から，二人で毎日，して，して，暮らして成長していた。云々」

私は，初めて，この表現に出逢った時，毎日，して，して暮らしたとは，何をして暮らしたことか，と尋ねますと，婆さん答えて，

毎日へッペして暮らしていたのだ

と言って，私を狼狽させたものだった。この語は，東北方言では，女陰また性の交りを意味する語である。

この語は，ここだから言えたが国の人と面と向かって，まだ私は，口にしたことのない語である。婆さん顔色も動かさず，平然と言ったが，聞く方が顔を赤くした。（上掲書　p. 9～10）（下線は渡辺。）

道祖神祭りや秋祭りの夜に女陰と性行為を意味する俚言を含んでいる祭り歌をそのおおやけの祭の場で大声で歌うことを村の伝統的な習俗として公認している性文化，それに女陰と性行為の二つを意味する北海道方言（さらには東北方言）の俚言であるへッペをアイヌの老婆に顔色一つ変えずに平然と言わせる性文化。これは，俵さんの発言の背後にある性文化やへッペという俚言を聞いただけで狼狽し赤面したという金田一さんの背後にある性文化とは全く異質のものである。

同じ藤林さんの『性風土記』によると，群馬県吾妻郡六合（くに）村赤岩部落では，大正年間まで毎年1月14日の道祖神の祭りには部落の各家でほぼ次のような行事が行なわれていたという。

猿田彦命の掛図に灯明をともし，供物をそなえる。かたわらの囲炉裏には火が赤々と燃えている。その囲炉裏のまわりで，素っ裸になったその家の主人が自分の男根を振りながら，「粟穂（あわば）も稗穂（ひえぼ）もこのとおり。」と唱える。それを受けて，同じく素っ裸になったその家の主婦が片手で自分の女陰をたたきながら，「大きなかますに七かます。」と唱える。二人は，この掛け合い問答めいた唱詞と動作をくり返しながら，素っ裸のまま四つんばいになって囲炉裏の周囲をまわる……というのである。

現代日本の社会で支配的かつ標準的な性文化の価値観に立てば，この光景は，おそらく俵さんならずとも，卑猥・わいせつの一語に尽きると言うであろう。しかし，日本の常民の民俗文化がもっている性信仰の文化からみれば，これは，彼らがその年の豊穣を祈願して行なう神聖な類感呪術であり，決して他から卑猥・わいせつと非難される筋合のものではなかった。

これまで性信仰に関して民俗学者が報告している事例は，非常に多い。これらを見ると，要するに日本の基層文化がもっている伝統的な性文化と，今日日本文化が標準的なものとしている性文化とは，全く異なる論理と価値尺度の上に成立していることがわかる。したがって，その異なる論理と価値尺度を無視して，他を一方的に非難することは明らかに不当である，と言わねばならない。

ただし，性行為を意味する俚言の使用についておおらかな態度をとるということと，その性行為を意味する俚言が他方において女陰を意味する俚言でもあるということとは，全く別個の問題である。性行為と女陰の双方を意味する俚言は，性行為を意味する多くの語の中の一つに過ぎないからである。日本書紀や古事記を読むと，神々の営む性行為は，トツギ・ミトアタハシツ・ミトノマグハヒなどの語を使ってきわめておおらかに描写されている。ところが，岩波日本古典文学大系『日本書紀』の注によると，これらの語の中に含まれている「ト」という形態素は，女陰だけでなく男陰も，つまり陰部一般を意味するとされている。(同書p.549～550)

4　今後の調査のための若干の仮設

それでは，男陰ではなく女陰を意味する俚言によって性行為を意味するという型の成立根拠は，どのように説明したらよいのであろうか。今後の調査にまたねばならぬ問題だが，さしあたって現在，この今後の調査のために，次の三つの作業仮説を立てておくことはできるだろう。

(1)　性行為に対する男女の生理学立場の違いに結びつける仮説――一般的に言って，性行為に対して，男性は能動的立場をとり，女性は受動的立場をとる。この立場の違いは，いわば生理学的なものであって(注5)，人種や民族，それに

文化や時代の違いをこえて存在するものであろう。女陰を意味する俚言によって性行為を意味しようとする発想は，この生理学的立場の違いにもとづいて，おそらく性行為を男性の側からとらえたものではないか，という仮説である。

(2) 男性本位の享楽的・消費的な性文化に結びつける仮説——古くは江戸の吉原などによって代表される遊女・遊郭の性風俗，新しくはヌード・ストリップ・トルコ風呂の性風俗などが典型的に示しているように，日本社会の享楽的・消費的な性文化は，男女の間にバランスを欠き，いちじるしく男性本位の構造をとっている。この男性本位の性文化は，政治・経済・社会・法制などの構造が男性本位の構造をとっていることと関連があるのであって，(1)の生理学的立場の違いに全面的に関係があるとは考えない。そして女陰を意味する俚言によって性行為も意味しようとする発想は，とどのつまりこの男性本位にできあがった享楽主義的性文化の言語的反映なのではないか，という仮説である。

(3) 常民の性信仰，とりわけ女陰信仰の伝統文化に結びつける仮説——享楽的・消費的な性文化から離れて考えれば，性行為の目的はもちろん生殖にある。性行為そのものが目的なのではなく，それによって結果される女性の姙娠——出産という生殖過程に目的がある。しかし，この性行為——姙娠——出産という生殖過程のすべてに関与できるのは，女性であって，男性ではない。男性は，わずかに最初の性行為の段階で女性の胎内に精子を注ぎこむ役割しかもっていない。女陰を意味する俚言によって性行為を意味するという発想は，この性行為——姙娠——出産という女の性がもっている神秘的な働きに対する信仰と結びつけて考えることができないか，という仮説である。

ちなみに民俗学者吉野裕子さんは，日本の祭りの本質は，日本人の性信仰の問題をぬきにしてはとらえられないという立場から，その著『祭りの原理』(慶友社　昭和47年）の冒頭で次のように述べている。

> 私ども現代の日本人はその祖先達に較べて，その心底ではいざ知らず，すくなくとも表面的には非常に取澄ました人間になっている。
>
> それは時代が進み，文明開花の結果来るべき当然の変化であって，いいとか悪いとかの問題ではない。ただこの取繕っているという事実をよほど意識してかからないと，古代の見方を誤るのではなかろうか。

記紀の伝えるところでは，天孫降臨に際し，天鈿女（あめのうずめ）は天神の命によって，道に立ちふさがる男性の猿田彦神に対し，前を露わにして立ち向い，これを降したという。

琉球には「女は戦の先がけ」という言葉があって，事実神に仕える巫女が一軍の先頭に立ち，手草を振り，前を露呈して敵を呪詛したといい，この本文中にも引用したが，同じ琉球の首里の鬼の話は，露出された女の陰（ほと）が，人を喰う鬼からさえ畏怖されたということなのである。

それらの有様の一つ一つを具体的に眼前に画いてみると，こっけいというよりもむしろ恐ろしいような情景である。白昼堂々と大真面目でそういうことが，しかもいずれもその話の主達の生死にかかわるほどの重大な時点において行なわれたのである。それは好色とかわいせつとかの気持の入りようもない生命の瀬戸際の行為である。これらの行為の底にあるものは何か。

記紀に活躍する女神達の死因の多くは，その陰（ほと）にかかわりをもつ。心臓を衝かれてとか，全身火傷とかいう記事は見当らない。それは裏返せばいかに女の陰に霊力が感じられていたかを証するものであろう。

こういう伝承に示される古代ほど，古代を古代たらしめているものはない。古代はそこに自分を鮮かにうかび上らせる。

「性」が日本の祭り・信仰をはじめ民俗事象の全般にわたって顔をのぞかせる現象は，稲作民族としての日本人の豊饒への類感呪術としてのみとらえられてきた。こうした解釈は，「性」が信仰の主流ではなく，いわば傍系におかれていたことを示す。しかし「性」は日本人の信仰の中枢にあるものであって，この位置において「性」をみなければ日本古代信仰の本質は把握できないと私は考える。（p. 1～2）（下線は，渡辺。）

「性」を日本人の信仰の中心にすえたほうがよいのか。それともこれまでのように傍系においたほうがよいのか。この論議に参加する能力は，もちろんもちあわせていない。しかし，ともかく金精神・道祖神・陰陽石・いろいろな祭事習俗や予呪行事などに関してこれまで日本民俗学が明らかにしてきた性信仰

の多くの事例を前にしたとき，女陰を意味する俚言によって性行為も意味する日本人の発想は，やはりこの生殖をめぐって，性，とりわけ女の性（その外的象徴としての女陰）に対してもっている信仰の問題をぬきにしては説明できない側面があるのではないか，という作業仮説も成り立ってくるのである。

以上に述べたことは，全くの作業仮説に過ぎない。このうち(1)か(2)の仮説が真実だということになれば，前に引用した俵さんの非難は正しい。しかし，わたしは，それだけでなく，やはり(3)の仮説もかなりの程度かかわり合っているのではないか，と思っている。ともあれ，どれが最も有力であるか（または，どれも有力でないか）の回答は，やはり小論の冒頭で述べたように，異民族の性に関する文化とことばの比較文化論的な調査を進めることによって，かなりの程度用意されてくるものであろう。異民族・異民族語の事情を御存じの方にその辺の御教示を切にお願いしたい。

（注５）女性がいかに能動的立場をとろうとも，男性器の勃起なくしては，性行為は絶対に行なわれ得ない。この意味で性行為という生物学的な行為そのものにおいて能動的立場をとるのは，窮極的にはやはり男性であって，女性ではない，と言えるだろう。（昭和48・５・22）